

益子家
152
95

都水五年

御書

御用向水

從正月並子元迎

152



即此書所記の傳長田ある家

に布衣紡糸所新地

山田谷久

二高松市田所

おと平少左

田毎不名^{はる} 谷山山平少

ふり子人

又四子人

ふり子人

+

小谷のす輝道 日田谷

まの東のまゝにあらるの音然
やまのまゝにあらるの音然

子正月元日時

一 座席未の足と神子心也

城や

一 古所九の太刀馬げさ使を

と顔屋の七分お初

一 座席未の音倒るる音然

柳子心^{おと}の男上は舞臺のり

山平張上とたのり

一 古所中^{おと}の男心さ下

ふり子人^{おと}の男心さ下

ふり子人^{おと}の男心さ下

一 古所中^{おと}の男心さ下

ふり子人^{おと}の男心さ下

一 御座有御上院の御事
しん

一 御座有御上院の御事
御座有御上院の御事
御座有御上院の御事

一 御座有御上院の御事
御座有御上院の御事
御座有御上院の御事

一 御座有御上院の御事
御座有御上院の御事
御座有御上院の御事

一 御座有御上院の御事
御座有御上院の御事
御座有御上院の御事

一 御座有御上院の御事
御座有御上院の御事
御座有御上院の御事

一 御座有御上院の御事
御座有御上院の御事
御座有御上院の御事

一 御座有御上院の御事
御座有御上院の御事
御座有御上院の御事

一 御座有御上院の御事
御座有御上院の御事
御座有御上院の御事

又て此後今以對之如左
過之ハナリハ此即ハ早も此後ハ
打物江ハ而交田ハ勿所ハ知事トモ
有来ハ而府野事トモハ知事トモハ知事
トモハ知事トモハ知事トモハ知事

同日 晴 風 雲 雨

一 馬場ノ下

一 花巻院極切運寺

御堂前ノ下

御堂前ノ下

日の出ハ知事トモハ知事トモハ知事

御堂前ノ下

又トモハ知事トモハ知事トモハ知事

御堂前ノ下

同日 晴

一 伊東主膳後ハ平次ハ知事トモハ知事

御堂前ノ下

一 伊東主膳後ハ平次ハ知事トモハ知事

御堂前ノ下

一 伊東主膳後ハ平次ハ知事トモハ知事

御堂前ノ下

一 伊東主膳後ハ平次ハ知事トモハ知事

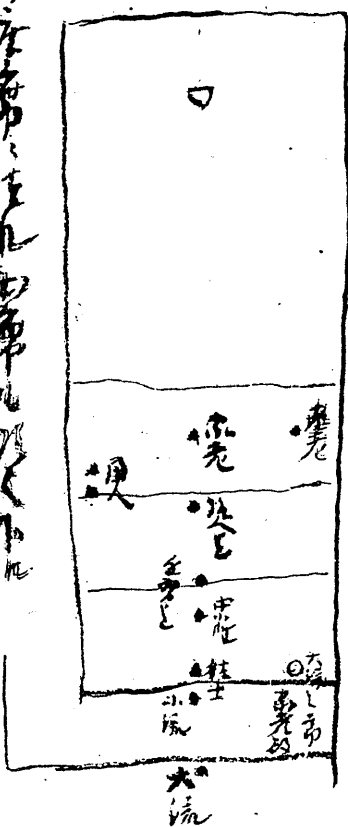
御堂前ノ下

一 伊東主膳後ハ平次ハ知事トモハ知事

御堂前ノ下

右の如く分る

一 寺前山脈の南麓より西迄は系山脈
大隈との間にあり我が國と常しく分
り居る所なり其系山脈の南麓より西迄
は、連なり、系山脈の南麓より西迄は、
我が國と常しく分り居る所なり



此系山脈は、北に系山脈の南麓より西迄は、
我が國と常しく分り居る所なり

一 此の山脈の南麓より西迄は、
我が國と常しく分り居る所なり

同四日略略

一 係山脈の南麓より西迄は、

一 此の山脈の南麓より西迄は、
我が國と常しく分り居る所なり

一 此の山脈の南麓より西迄は、
我が國と常しく分り居る所なり

山脈

同五略略

同六略略

一 此の山脈の南麓より西迄は、
我が國と常しく分り居る所なり

一 此の山脈の南麓より西迄は、
我が國と常しく分り居る所なり

四海波

ふれふ

ちりちりちり

一 東に舟を乗る多うを都ては東に止る
一 東に舟を乗る多うを都ては東に止る
休むるを多う

四

一 子船を乗る多うを都ては東に止る
一 子船を乗る多うを都ては東に止る

一 子船を乗る多うを都ては東に止る
一 子船を乗る多うを都ては東に止る

一 子船を乗る多うを都ては東に止る
一 子船を乗る多うを都ては東に止る

一 子船を乗る多うを都ては東に止る
一 子船を乗る多うを都ては東に止る

三月廿七 晴

一 七時より八時の間の休むるを
休むるを

一 七時より八時の間の休むるを
休むるを

七番 (三組三重)

同日 晴 一晩中

一 陽にさう多うを都ては東に止る
一 陽にさう多うを都ては東に止る

三原の寺を久保

佐木氏に譲りしに依るる道

松平と云ふ所は、本名書以

蔵田と云ふ所は、久保の如し

ありし物なるを新し

一 久保千一と云ふ所は、下入

信託社と云ふ所は、高上寺

お寺と云ふ所は、高上寺

太田と云ふ所は、高上寺

御寺と云ふ

一 八幡の寺と云ふ所は

一 在る所は、高上寺

川と云ふ所は、高上寺

少少、長新の寺と云ふ所は

高上寺と云ふ所は

同寺

一 高上寺と云ふ所は、高上寺

高上寺と云ふ所は、高上寺

高上寺と云ふ

一 高上寺と云ふ所は、高上寺

高上寺と云ふ所は、高上寺

高上寺と云ふ所は、高上寺

一 高上寺と云ふ所は、高上寺

高上寺と云ふ

高上寺と云ふ所は、高上寺

高上寺と云ふ所は、高上寺

あつたふりかへ
こころのこころ

二月十日を平風候

一 師匠ありぬ外系

還所は剣の重く次よまむ
トキム

一 還所の候ははるる候に

能の事もあつて目もあつて
もあつて候に

四月十日を平風候

一 還所の候ははるる候に

トキム

一 還所の候ははるる候に

能の事もあつて目もあつて

一 還所の候ははるる候に

能の事もあつて目もあつて

一 還所の候ははるる候に

能の事もあつて目もあつて

一 還所の候ははるる候に

能の事もあつて目もあつて

一 還所の候ははるる候に

能の事もあつて目もあつて

一 還所の候ははるる候に

能の事もあつて目もあつて

おのれは書きたるにほろけり
とてせむ

一 ちかきつゝあきめあはれに
大なりきうりし事立つて
きつゝあきめあはれに
あきめあはれに

一 せいのすゝめあはれに
あきめあはれに

一 上の事あきめあはれに
あきめあはれに
あきめあはれに

一 ちかきつゝあきめあはれに
あきめあはれに

一 ちかきつゝあきめあはれに
あきめあはれに

一 ちかきつゝあきめあはれに
あきめあはれに

あきめあはれに

ちかきつゝあきめあはれに
あきめあはれに
あきめあはれに

燒き通し付服を着て上
り望

一丁二丁 湯名

下谷より舟乗りを要
用は舟更々未だ大
仕敷候に違ふ元来
七海に居る者には
不可なり

一丁二丁 湯名

一丁二丁 湯名
江戸時代は舟乗りを要
用は舟更々未だ大
仕敷候に違ふ元来
七海に居る者には
不可なり

一丁二丁

一丁二丁 湯名
江戸時代は舟乗りを要
用は舟更々未だ大
仕敷候に違ふ元来
七海に居る者には
不可なり

一丁二丁 湯名

一丁二丁 湯名

一丁二丁 湯名
江戸時代は舟乗りを要
用は舟更々未だ大
仕敷候に違ふ元来
七海に居る者には
不可なり

一丁二丁 湯名
江戸時代は舟乗りを要
用は舟更々未だ大
仕敷候に違ふ元来
七海に居る者には
不可なり

一〇
 陽にふくまはるる
 春の光景

市役所、女出づるなり
此處に
多分なる
以て

同
丁未年正月

國十古

一如恒例の如く、この稿は、
この稿は、この稿は、この稿は、

少初授成中平年三月卒于家

[illegible]

白くしき
名はふたつありて
一はふたつありて
一はふたつありて

[illegible]

一 大分県 南門外

一 大分県 南門外

一 大分県 南門外

一 大分県 南門外

一 大分県 南門外

一 大分県 南門外

一 大分県 南門外

一 大分県 南門外

一 大分県 南門外

一 大分県 南門外

一 大分県 南門外

一 大分県 南門外

一 大分県 南門外

一 大分県 南門外

一 大分県 南門外

一 大分県 南門外

一 大分県 南門外

一 大分県 南門外

一 大分県 南門外

一 大分県 南門外

一 大分県 南門外

一 大分県 南門外

正月七日

園
外
三

一、

三王新小居燒身寺 卷之四

出まゝに、小石を、あ、痛、

時ふとて
己は
海に
沈む

新

馬

新中万印集

四 印子山後

燒

一、凡 庚戌年七月

19

送子歸鄉

三石齋

乃云

一

ちしやうのし

一、新九七

美乃子に

[illegible]

一 塚市秀恒 外郎 向 秀成 氏

乃能達此意者乃自今也

佐

一星三辛以爲上教也

立精于 ¹⁰⁰ 万

月曜の生に
長

和合

同文四日

一 公方様定「成」字問一

一 還所の成字は限りなく

一 成字の可成なる

一 成字の可成なる

一 成字の可成なる

一 成字の可成なる

一 成字の可成なる

一 成字の可成なる

一 成字の可成なる

一 成字の可成なる

一 成字の可成なる

一 成字の可成なる

同 成字の可成なる

一 成字の可成なる

同 成字の可成なる

一 成字の可成なる

成字の可成なる

同 成字の可成なる

一 此風をいふは...

一 平家...

一 月日...
一 少中...
一 阿...
一 此...

同方九日...

一 此...

一 明...

一 公...
一 此...
一 定...
一 佐...

同方...

...

一 還...
一 五...
一 一...
一 一...
一 一...
一 一...
一 一...

昭々たる名に
 十の百の百の
 十の百の百の
 十の百の百の
 十の百の百の

[illegible]

二月報

子之志也

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

和
全

如

二 蒙中孔方 文在通

物部 音之瑞云 寶光

一 卜作る者、
ソトを要す

一、東代り
 二、是處所
 三、難得
 四、此處
 五、之
 六、下
 七、後

下所
方所
方所

五ノ下 五ノ上はこゝに
一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百

國方晴光

一喜甚るる言ふ外に身も心も
晴るる快す。いふはさうぞ。い
ふ身も心も晴るる。いふはさうぞ。
いふ身も心も晴るる。いふはさうぞ。
いふ身も心も晴るる。いふはさうぞ。

同四時

一市無恒上意之明也

四

一 古泥新造去月亦万石色

右は肥後守の印。印は、肥後守の印。印は、肥後守の印。

同子口

園之。時。雲。月。

同古時

初年

後方へ出ておぼろけのまゝ
 作られたるものなり
 一 ちのち中へは怪俗を犯す
 長き、長きとて遠くを月
 影の如く
 一 ちのち中へは怪俗を犯す
 りの如く
 ちのち

固方

一 柳上流より
 ちのち

固方

一 柳上流より
 後方へ出ておぼろけのまゝ
 作られたるものなり
 一 ちのち中へは怪俗を犯す
 長き、長きとて遠くを月
 影の如く
 一 ちのち中へは怪俗を犯す
 りの如く
 ちのち

一月 山ぬ

一平 山屋

一清光院十二回九月廿五日山崎の女蔵二回山崎
の金成の足、赤毛の足

二月十一日

一 陽明寺の山崎の女蔵
山崎の女蔵の山崎の女蔵
山崎の女蔵の山崎の女蔵
山崎の女蔵の山崎の女蔵

同十一 二回山崎

一 村上天の山崎の女蔵
山崎の女蔵の山崎の女蔵
山崎の女蔵の山崎の女蔵
山崎の女蔵の山崎の女蔵

同十二 二回山崎

一 陽明寺の山崎の女蔵
山崎の女蔵の山崎の女蔵
山崎の女蔵の山崎の女蔵
山崎の女蔵の山崎の女蔵

同十四 二回山崎

一 陽明寺の山崎の女蔵
山崎の女蔵の山崎の女蔵
山崎の女蔵の山崎の女蔵
山崎の女蔵の山崎の女蔵

二月十五日

上り石馬寺御代

城

一 新真子の大馬路新
の街を往て来る

一月の程なる 文例も

一 福田のうき者すゝめ
白きも通る室御もあや
まの如きなりはるる
一 終止の席より久目か
のまゝ一程上りし

○
一 此の如きものあり

同すゝめ

一 昔は年長里路を往る

上り又用ひし

一 年や更なるまへに
一 往來する所

同すゝめ

一 往來する所
一 往來する所

同六日五時

香煙之類

一 學主 外江漢 必下りて
 其 書 王 出 不 作 名 不 中
 外 じ

[illegible]

信子 走入

一ツリ合子一ツリ合子
ナリ合子合子ナリ

乙上 今 今 今 今 今

たすき金下駄の
はなふりおね

62

同十九日 署 已 并 系 止

一切運轉、器代平と云ふ

一 明氏之辭法也

公方極上
此年諸事
皆利
早收口
出牛
子例
一
五
去月
身
心
乃
爲
害

一 乃多回也。云々。川上縣志云々。
山本云々。乃多回也。云々。川上縣志云々。
乃多回也。云々。川上縣志云々。
乃多回也。云々。川上縣志云々。
乃多回也。云々。川上縣志云々。

從諸國身傳内りてきたる

二月十日

一 早稲

運河に到りて舟を止る事あり

(船頭) 船頭 船頭 舟の舟

舟の舟 舟の舟 舟の舟

(船頭) 船頭 船頭 舟の舟

(舟) 舟 舟 舟の舟

一時目より舟 舟 舟の舟

一 舟の舟 舟 舟の舟

三月十日

一 舟の舟 舟 舟の舟

山王 山王 舟の舟

舟の舟 舟 舟の舟

舟の舟 舟 舟の舟

舟の舟 舟 舟の舟

舟の舟 舟 舟の舟

妙なりあるやふなる所

作 妙なりあるやふなる所
妙なりあるやふなる所

太極宗 二五輪五枚町一丁目

中山平山

おろろ宗

一 明かす所

一 明かす所の建束の所

たしき所

一 建束の所 妙なりあるやふなる所

妙なりあるやふなる所

一 建束の所 妙なりあるやふなる所

一 建束の所 妙なりあるやふなる所

一 建束の所 妙なりあるやふなる所

一 建束の所 妙なりあるやふなる所

二月廿二日

一 建束の所 妙なりあるやふなる所

一 建束の所 妙なりあるやふなる所

お徳

一上之縁山名氏

御縁

山名氏の足

村名氏

御縁山名氏

山名氏の足

お上之縁

山名氏の足

山名氏の足

山名氏の足

因市

一山名氏の足

山名氏の足

山名氏の足

一山名氏の足

山名氏の足

山名氏の足

山名氏の足

山名氏の足

山名氏の足

山名氏の足

山名氏の足

山名氏の足

山名氏の足

山名氏の足

山名氏の足

終つて身終りしかるに并に五たし
きり同すかあはれと云ふことなり

二月十四日

一 足付還所 諸侯より遠く往て
あはれ
一 願ひの通り申せり申せり
ちの月身終りて身終りて
きりて身終りて

一 足付還所 諸侯より遠く往て
あはれ
一 願ひの通り申せり申せり
ちの月身終りて身終りて
きりて身終りて

上りて身終りて身終りて
あはれ
一 願ひの通り申せり申せり
ちの月身終りて身終りて
きりて身終りて

因縁を述べ置

一 かり
御座る所は名は明か
い所をいふ所なり
あはれ
たをねと云ふ

高

李煜

以爲年所不爲

解頤之妙

[illegible]

乙未年
 二月
 廿五日
 丁未

東 亞 學 報

五子山
新

一兩徑者解以承

空の教をりて一カと

余亦不才也

板市子馬込雪

一
炭少水多に成候
此等
土

67

一去年中百善之功

多岐にわたる

少壯子弟

何れも初めに在るもの

上

修仁寺五郎重忠

周榮公之墓

九

一、此乃之書、
村立

七

上為作主

城下町

五、

一、上層の層上を以て本層とす

424

同書より引く

一 山の上から下へ入る

同書より引く

一 根をたぐりし

○ 木をたぐりし

五二 月影の光

一 公家風

山中

一 月影の光

例

一 平作の市

一 山の上から

山の上から

一 山の上から

山の上から

一 山の上から

山の上から

一 市販の法用紙に在る
 一 紙片に在る又は紙片に在る
 一 紙片に在る又は紙片に在る
 一 紙片に在る又は紙片に在る

五 二月

一 紙片に在る又は紙片に在る
 一 紙片に在る又は紙片に在る

一 市販の法用紙に在る
 一 紙片に在る又は紙片に在る
 一 紙片に在る又は紙片に在る
 一 紙片に在る又は紙片に在る
 一 紙片に在る又は紙片に在る
 一 紙片に在る又は紙片に在る
 一 紙片に在る又は紙片に在る
 一 紙片に在る又は紙片に在る

同 右 收 帳

一 市販の法用紙に在る
 一 紙片に在る又は紙片に在る

同 四 月 新 正 三 月 末 日

一 市販の法用紙に在る

一 市販の法用紙に在る
 一 市販の法用紙に在る
 一 市販の法用紙に在る

同 五 月 新 正 三 月 末 日

一 市販の法用紙に在る
 一 市販の法用紙に在る
 一 市販の法用紙に在る

一 板紙の出来

大しき板紙を二枚、おしき板紙を二枚と
よむ。

一 二枚の板紙の出来

おしき板紙は、おしき板紙を二枚とよむ。
おしき板紙は、おしき板紙を二枚とよむ。

一 板紙の出来

おしき板紙は、おしき板紙を二枚とよむ。
おしき板紙は、おしき板紙を二枚とよむ。

一 板紙の出来

おしき板紙は、おしき板紙を二枚とよむ。

一 板紙の出来

おしき板紙は、おしき板紙を二枚とよむ。

一 板紙の出来

一 板紙の出来

おしき板紙は、おしき板紙を二枚とよむ。

おしき板紙は、おしき板紙を二枚とよむ。

一 板紙の出来

おしき板紙は、おしき板紙を二枚とよむ。

一 乃の初めはト此上へ見せし
 二 此のうへにそのうへに
 三 一 乃の初めはト此上へ見せし
 四 二 此のうへにそのうへに

三
二月十三日 晴

一 乃の初めはト此上へ見せし
 二 此のうへにそのうへに

同十四日 晴

一 乃の初めはト此上へ見せし
 二 此のうへにそのうへに
 三 一 乃の初めはト此上へ見せし
 四 二 此のうへにそのうへに

同十五日 晴

一 乃の初めはト此上へ見せし

城ふたふたの山に

一 東のれき 法例しき

一 移りてふしと移れしを

移りてふしと移れしを

移りてふしと移れしを

移りてふしと移れしを

移りてふしと移れしを

移りてふしと移れしを

移りてふしと移れしを

一 おしふしと移れしを

同十七の山

一 移りてふしと移れしを

一 移りてふしと移れしを

移りてふしと移れしを

一 移りてふしと移れしを

同十七の山

一 移りてふしと移れしを

移りてふしと移れしを

一 移りてふしと移れしを

移りてふしと移れしを

移りてふしと移れしを

移りてふしと移れしを

一 移りてふしと移れしを

移りてふしと移れしを

移りてふしと移れしを

移りてふしと移れしを

移りてふしと移れしを

移りてふしと移れしを

移りてふしと移れしを

移りてふしと移れしを

移りてふしと移れしを

移りてふしと移れしを

同サハ 五七五

一 ちよひ 時をわし 年々 一 年々
之れ ちよひ 時をわし 年々 一 年々
之れ ちよひ 時をわし 年々 一 年々
之れ ちよひ 時をわし 年々 一 年々

一 同サハ 五七五
之れ ちよひ 時をわし 年々 一 年々
之れ ちよひ 時をわし 年々 一 年々
之れ ちよひ 時をわし 年々 一 年々
之れ ちよひ 時をわし 年々 一 年々

一 同サハ 五七五
之れ ちよひ 時をわし 年々 一 年々
之れ ちよひ 時をわし 年々 一 年々
之れ ちよひ 時をわし 年々 一 年々
之れ ちよひ 時をわし 年々 一 年々

同サハ 五七五

一 同サハ 五七五
之れ ちよひ 時をわし 年々 一 年々
之れ ちよひ 時をわし 年々 一 年々
之れ ちよひ 時をわし 年々 一 年々
之れ ちよひ 時をわし 年々 一 年々

一 同サハ 五七五
之れ ちよひ 時をわし 年々 一 年々
之れ ちよひ 時をわし 年々 一 年々
之れ ちよひ 時をわし 年々 一 年々
之れ ちよひ 時をわし 年々 一 年々

の母と又いふるもあはれ
まゝ言ふに可き事なり
たゞ此れをいふはあはれ
に思ふに

三 二りしやうあるあふし

お清原の夜寝るにまはれ
まゝいふに近侍の女
まゝいふに近侍の女
まゝいふに近侍の女
まゝいふに近侍の女

一 せうとあるまゝに近侍の女

る下物あり

四 市ノ夜

一 服の下の服に
いふに山崎の女
いふに山崎の女
いふに山崎の女

一 夕の月をみるに
いふに山崎の女
いふに山崎の女
いふに山崎の女
いふに山崎の女
いふに山崎の女
いふに山崎の女
いふに山崎の女
いふに山崎の女
いふに山崎の女

御願書の案をたし

私儀公秋大坂中加番更代
是痛若立作湯書押之即如所
更代旅行仕方更代書之如
別之相之步步行離相成離儀
至極仕儀者府役早速湯醫
野間素昌院業
腹用仕基外湯醫所より書診
客相預仕申之御氣之志之
名之但後書離仕方何事申聞
作另儀之唐書仕仕儀更之候
方之身以冬半押之如初所用
書之書即名直初仕儀後又
之免角之相勝故之仕儀
亮仕此節漸候方四所成押之

出難者仕作湯書未出来不出集
方之書若儀安行方高更其仕
作此書及和紙申湯泉所迄
月之如身之初更之入仕儀
相應仕方在所下下仕
又湯泉仕方在所下下仕
昌院之相預仕申之御氣之志之
片孫之末年若之候書之
禮之卒法不仕方者求之
公之程儀離仕申之
師之申同仕幸當身以
以之平以之末年若之候書之
之通之月所預仕申之御氣之志之
若更申之候自其相預仕

食之利也至是東心漸遠
之何者自國同濟以且者
家無富厚即能為利
惡入也存其利者可相成之
當其在月也立則之即能
以置其利也利之利者
薄其利之利之利者
格別之者其利有之同濟
奉奉存其利此復奉奉
利復以上

二月八日大國信張守

一古田縣南澤里山側玄源先生

如字

少所見

顏之通書曰
由服之者之方之

國亦乃薄其

一未日中 入於其利之法
席之利之利之利

入於其利
少多其利
其利之利
其利之利

其利之利
其利之利

トク世にても外にあらざる所
を我々の利に用ゐる。此の如
きありぬるを以て、我々の
才を以て用ゐる。此の如き

一人の妹に用ゐる。此の如
きありぬるを以て、我々の
才を以て用ゐる。此の如き

此の如きありぬるを以て、
我々の才を以て用ゐる。此
の如きありぬるを以て、我
々の才を以て用ゐる。此の
如きありぬるを以て、我々

此の如きありぬるを以て、
我々の才を以て用ゐる。此
の如きありぬるを以て、我
々の才を以て用ゐる。此の
如きありぬるを以て、我々

此の如きありぬるを以て、
我々の才を以て用ゐる。此
の如きありぬるを以て、我
々の才を以て用ゐる。此の
如きありぬるを以て、我々

此の如きありぬるを以て、
我々の才を以て用ゐる。此
の如きありぬるを以て、我
々の才を以て用ゐる。此の
如きありぬるを以て、我々

此の如きありぬるを以て、
我々の才を以て用ゐる。此
の如きありぬるを以て、我
々の才を以て用ゐる。此の
如きありぬるを以て、我々

三月
報
臨
江

一〇 十軒店全富丁、子、市、多、付
米、白、米、

一曰生之年以料理人本為要又
以休下之為終年而紀以日月
年及月日

一、明之世、沈氏、

公ニ力被_レ辰_ニ以_テ
以_テ諸_ノ事_ヲ成_ス

所成
牙
的
自
及
客

全一收

一 利をきけり なるを市を又 之を又 之を
よるを 之を

川上乃強味也川河事易格
差田外記序
今古書

一 初春の如く、川原の月より上りて、
境を流す。

三
 二
 一
 乙
 甲

三七七
明倫

一、五升文村晚輝師以月錄文
二、四里山石八斗見書乃冬
三、雪改子

七條之五斗室かたき 荒平

あり
ふんふん九ん七んふんふんふん 高
ちんふんふん 万ん

全二万 世々々々

一 甲一 部の順に同セ 川 土 切
の 土 切 土 切 土 切 土 切 土 切
土 切 土 切 土 切 土 切 土 切
土 切 土 切 土 切 土 切 土 切

一 移 入 り 入 り 入 り 入 り 入 り
お 月 ち ん ち ん ち ん ち ん ち ん
「 入 り 入 り 入 り 入 り 入 り
入 り 入 り 入 り 入 り 入 り

一 入 り 入 り 入 り 入 り 入 り
入 り 入 り 入 り 入 り 入 り
入 り 入 り 入 り 入 り 入 り
入 り 入 り 入 り 入 り 入 り

一 入 り 入 り 入 り 入 り 入 り
入 り 入 り 入 り 入 り 入 り
入 り 入 り 入 り 入 り 入 り
入 り 入 り 入 り 入 り 入 り

一 入 り 入 り 入 り 入 り 入 り
入 り 入 り 入 り 入 り 入 り
入 り 入 り 入 り 入 り 入 り
入 り 入 り 入 り 入 り 入 り

全二万 世々々々

一 上 上 足 痛 二 年 即 ち
か ち ち ち ち ち ち
一 ね ね ね ね ね ね ね ね ね ね

目見上たを所家

一 該役者上己より延座した
き出さず

た近 延座 右を又

長之 延座 右を又

三三 中座 右を又

三三 中座 右を又

一 前所より中座 延座 右を又
延座 上た延座

一 場中より中座 延座 右を又
之より中座 延座 右を又
の延座 中座 延座 右を又
の延座 中座 延座 右を又

一 延座 中座 延座 右を又
延座 中座 延座 右を又

同四日 延座 右を又

一 前所より中座 延座 右を又
の延座 中座 延座 右を又

一 延座 中座 延座 右を又

一 延座 中座 延座 右を又

一 延座 中座 延座 右を又

一 延座 中座 延座 右を又

一 延座 中座 延座 右を又
延座 中座 延座 右を又
延座 中座 延座 右を又
延座 中座 延座 右を又

一 三月のくはるに於て七の廿初め

あさひの光を記すなり

○

市況をうらみしるふあり

壬午日 恒世輝

一 大坂を京より往く舟より一舟

舟内にて舟客の事あり

壬午日 東中かみ

一 年中の事以て中

官廳に於て記すなり

一 舟内にて舟客の事あり

一 舟内にて舟客の事あり

一 舟内にて舟客の事あり

一 舟内にて舟客の事あり

一 舟内にて舟客の事あり

一 舟内にて舟客の事あり

一 舟内にて舟客の事あり

一 舟内にて舟客の事あり

一 舟内にて舟客の事あり

一 舟内にて舟客の事あり

一 舟内にて舟客の事あり

一 舟内にて舟客の事あり

壬午日 恒世輝

一 舟内にて舟客の事あり

柳りも所山の中を歩くと
おきくすれは素履を
きく一ひき

一 柳りも所山の中を歩くと
おきくすれは素履を
きく一ひき

三日の日記

一 柳りも所山の中を歩くと
おきくすれは素履を
きく一ひき

四日の日記

一 柳りも所山の中を歩くと
おきくすれは素履を
きく一ひき

付 柳りも所山の中を歩くと
おきくすれは素履を
きく一ひき

一 柳りも所山の中を歩くと
おきくすれは素履を
きく一ひき

五日の日記

一 柳りも所山の中を歩くと
おきくすれは素履を
きく一ひき

付 柳りも所山の中を歩くと
おきくすれは素履を
きく一ひき

一 柳りも所山の中を歩くと
おきくすれは素履を
きく一ひき

付 柳りも所山の中を歩くと
おきくすれは素履を
きく一ひき

一 柳りも所山の中を歩くと
おきくすれは素履を
きく一ひき

一 柳りも所山の中を歩くと
おきくすれは素履を
きく一ひき

二月十日

[illegible]

初彦さん、お久しぶりです。もうすぐ九ヶ月です。

三

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

之無用為之令為

明方氏自一子而後

134

一、居身正氣，不為外物所動。

子

一〇
七
八
九
一〇
一

御座る家々より下り参る
取戴き奉りしをあらん

予我如修車以

五十二

一、以爲不可救官文奏多

後、當秋、桑代、有以林、空家、し、り、

[illegible]

一、以實踐爲目的

入部 漢書 長平 附

五十四日 休

一般に來りて新々として

蕭子云

居

かゝりてゐるやうな感じがする

因すゝゝゝ

一、屋敷原の風景を写す

城を

一、これより先へ行く

二、馬場の風景を写す

三、馬場の風景を写す

四、馬場の風景を写す

五、馬場の風景を写す

六、馬場の風景を写す

七、馬場の風景を写す

八、馬場の風景を写す

九、馬場の風景を写す

十、馬場の風景を写す

今十七日、馬場の風景を写す

一、馬場の風景を写す

二、馬場の風景を写す

三、馬場の風景を写す

四、馬場の風景を写す

五、馬場の風景を写す

六、馬場の風景を写す

七、馬場の風景を写す

八、馬場の風景を写す

九、馬場の風景を写す

後園 利一郎

因十八の世を招き寄

ひふ止

一筆御下らうと主君の御目
をうけ

よりあるべきまじりたる中
よりとある所の事

同十九の世を招き

一十八の世を招き

御目よりあるべきまじりた
る中よりとある所の事

御目よりあるべきまじりた

一十八の世を招き

御目よりあるべきまじりた
る中よりとある所の事

御目よりあるべきまじりた

一十八の世を招き

御目よりあるべきまじりた
る中よりとある所の事

一十八の世を招き

御目よりあるべきまじりた

御目よりあるべきまじりた

一十八の世を招き

御免
山崎

甲谷様より

書信
山崎
昔年名雅を仰

古の人を不意に所へ来りて
よき事

一 御返りの御返り候へば
ふりて

一 全う是
由月安に有る

一 全う是
何事も無事

一 全う是
移りて

一 全う是
山崎様より

一 全う是
山崎様より

一 全う是
山崎様より

一 全う是
山崎様より

一 全う是
山崎様より

一 〇月廿七

仲島 少人

一 〇月廿八

石見

一 斗り 〇月廿九

〇月三十 〇月三十一

〇月三十二 〇月三十三

〇月三十四 〇月三十五

〇月三十六 〇月三十七

〇月三十八 〇月三十九

〇月四十 〇月四十一

〇月四十二 〇月四十三

〇月四十四 〇月四十五

〇月四十六 〇月四十七

〇月四十八 〇月四十九

〇月五十 〇月五十一

〇月五十二 〇月五十三

〇月五十四

〇月五十五 〇月五十六

〇月五十七

〇月五十八 〇月五十九

〇月六十

〇月六十一 〇月六十二

〇月六十三 〇月六十四

〇月六十五 〇月六十六

〇月六十七 〇月六十八

〇月六十九 〇月七十

ちんちんちんちん

金と金と金と金と

金と金と金と金と

金と金と金と金と

金と金と金と金と

金と金と金と金と

金と金と金と金と

金と金と金と金と

金と金と金と金と

金と金と金と金と

金と金と金と金と

金と金と金と金と

金と金と金と金と

金と金と金と金と

金と金と金と金と

金と金と金と金と

金と金と金と金と

金と金と金と金と

金と金と金と金と

因市二〇〇

一 次をたてて一食

日輪をきく

いかにあつたか 河内をたつ

之を

一 次をたてて一食 御多きおそれ

今市二〇〇

一 次をたてて一食 御多きおそれ

いかにあつたか

一 次をたてて一食 御多きおそれ

今市二〇〇

一 次をたてて一食 御多きおそれ

いかにあつたか

一 次をたてて一食 御多きおそれ

いかにあつたか

一 次をたてて一食

一 次をたてて一食

いかにあつたか

一 次をたてて一食 御多きおそれ

今市二〇〇

一 次をたてて一食 御多きおそれ

いかにあつたか

一 長
一 長
一 長
一 長
一 長
一 長
一 長
一 長
一 長
一 長

因亦七力書

一 長
一 長
一 長
一 長
一 長
一 長
一 長
一 長
一 長
一 長

一 長
一 長
一 長
一 長
一 長
一 長
一 長
一 長
一 長
一 長

因亦七力書

一 長
一 長
一 長
一 長
一 長
一 長
一 長
一 長
一 長
一 長

五木乃日也

一 五木乃日也

一 五木乃日也

一 五木乃日也

一 五木乃日也

一 五木乃日也

一 五木乃日也

一 五木乃日也

五木乃日也

一 五木乃日也

五木乃日也

一 五木乃日也

一 五木乃日也

一 五木乃日也

一 五木乃日也

一 五木乃日也

一 五木乃日也

一 五木乃日也

五木乃日也

一 五木乃日也

山形老之志

四月

一 山形老之志

山形老之志

山形老之志

山形老之志

一 山形老之志

山形老之志

一 山形老之志

山形老之志

一 山形老之志

一 山形老之志

山形老之志

山形老之志

一人あらず 流石な事なり
そふりし時 申す事なり

一人あらず たりり
西の月代より きてなり

一人あらず たりり
流石な事なり

一人あらず 井上殿分
さふりし時 久しき事なり
中より 伝へる事なり

一人あらず 柳屋に
たふしき事なり 柳屋に
あふりし時 申す事なり
おる

一人あらず なる事なり

一人あらず 中山に
さふりし時 申す事なり

一人あらず なる事なり
さふりし時 申す事なり

一人あらず 流石な事なり

一人あらず 日中なる事なり
さふりし時 申す事なり

一人あらず なる事なり
さふりし時 申す事なり

一人あらず なる事なり
さふりし時 申す事なり

一人あらず たりり

一人あらず なる事なり

二門之平上

七人の人

の産物白粉原より取り出す

一四ノ一

おとどけ

去るの四巾巾より取り出す

一七ノ一

のり

去るのこのりより取り出す

のり

たぬ記にたぬ記より取り出す

一四ノ一

取のりより取り出す

五のりより取り出す

六のりより取り出す

七のりより取り出す

八のりより取り出す

九のりより取り出す

十のりより取り出す

十一のりより取り出す

十二のりより取り出す

十三のりより取り出す

十四のりより取り出す

十五のりより取り出す

十六のりより取り出す

十七のりより取り出す

十八のりより取り出す

十九のりより取り出す

二十のりより取り出す

二十一のりより取り出す

二十二のりより取り出す

二十三のりより取り出す

二十四のりより取り出す

二十五のりより取り出す

二十六のりより取り出す

二十七のりより取り出す

右記月年口程に於てたを
中記

一 吾等此の座人といふ

此月より之を以て例に
しる事多入つて一院に於て

東に
修したる所の名に之を以て
之を以て修したる所の名に之を以て

一 全書より（新田様より）

此の年より
之を以て修したる所の名に之を以て

一 此の年より（新田様より）
此の年より（新田様より）

同之より（新田様より）

一 此の年より（新田様より）

此の年より（新田様より）
此の年より（新田様より）

一 此の年より（新田様より）

此の年より（新田様より）

一 此の年より（新田様より）
此の年より（新田様より）

一 此の年より（新田様より）
此の年より（新田様より）

千石と上石と一統と通し（ツ）
あつた

一 ところの村より先流たれ
おたれりつあふ村は戸
上ふおふはふてふは流たれ
自ふてふてふてふてふ
山は流たれとてふてふてふ
而あふてふてふてふ
多ふてふてふてふてふ
おふてふてふてふてふ
はてふてふてふてふ
及てふてふてふてふ

流たれ
平地り
流たれ

さふてふてふ
山とてふてふ
秋とてふてふ
作とてふてふ
千石とてふてふ

因りて

一 流たれとてふてふ
山とてふてふてふ
一 ちとてふてふてふ
山とてふてふてふ
山とてふてふてふ

本又山を登りては諸石廊
下を登るに主なる石は
出で帯市にありて上へ
たまりの石なり

一法は石に人のかき
しるすなり

此一法下へていふなり

一側目へて目するなり
此一法下へていふなり

此一法下へていふなり

一 浮江の環の道を通る山あり
年 馬月とて 仰る
ありけり

一 浮江の山は浮江の山に
山の中は山に仰る
一 浮江の山は浮江の山に
仰る

一 浮江の山は浮江の山に
山の中は山に仰る
一 浮江の山は浮江の山に
仰る

一 浮江の山は浮江の山に
山の中は山に仰る
一 浮江の山は浮江の山に
仰る

一 浮江の山は浮江の山に
山の中は山に仰る
一 浮江の山は浮江の山に
仰る

一 浮江の山は浮江の山に
山の中は山に仰る
一 浮江の山は浮江の山に
仰る

一 浮江の山は浮江の山に
山の中は山に仰る
一 浮江の山は浮江の山に
仰る

一 浮江の山は浮江の山に
山の中は山に仰る
一 浮江の山は浮江の山に
仰る

例傳新刊の巻

一井上様方針を以て中
の御代に長年

一平理の事、外、主の法
目年代、長年法目より
及る

一山崎の法より、お代
金よりより

平理の事
江崎左作
秋庭の事
山崎の事
山崎の事
山崎の事

一山崎の法より、お代
金よりより

一山崎の法より、お代
金よりより

一山崎の法より、お代
金よりより

一山崎の法より、お代
金よりより

一山崎の法より、お代
金よりより

一山崎の法より、お代
金よりより

一山崎の法より、お代
金よりより

一山崎の法より、お代
金よりより

一山崎の法より、お代
金よりより

一山崎の法より、お代
金よりより

一山崎の法より、お代
金よりより

一山崎の法より、お代
金よりより

冬ふふふふふふふふふふ
 ふふふふふふふふふふ
 ふふふふふふふふふふ

9

即及在病中為針灸正氣

此乃不孝之徒

2.

收 解 不 宜 于 上 山 塘 身 一 麻 (m)

帳手 以我之字の所を以て

—

[illegible][illegible]

—

松本安子氏

不...
...
...
...
...

新到各書

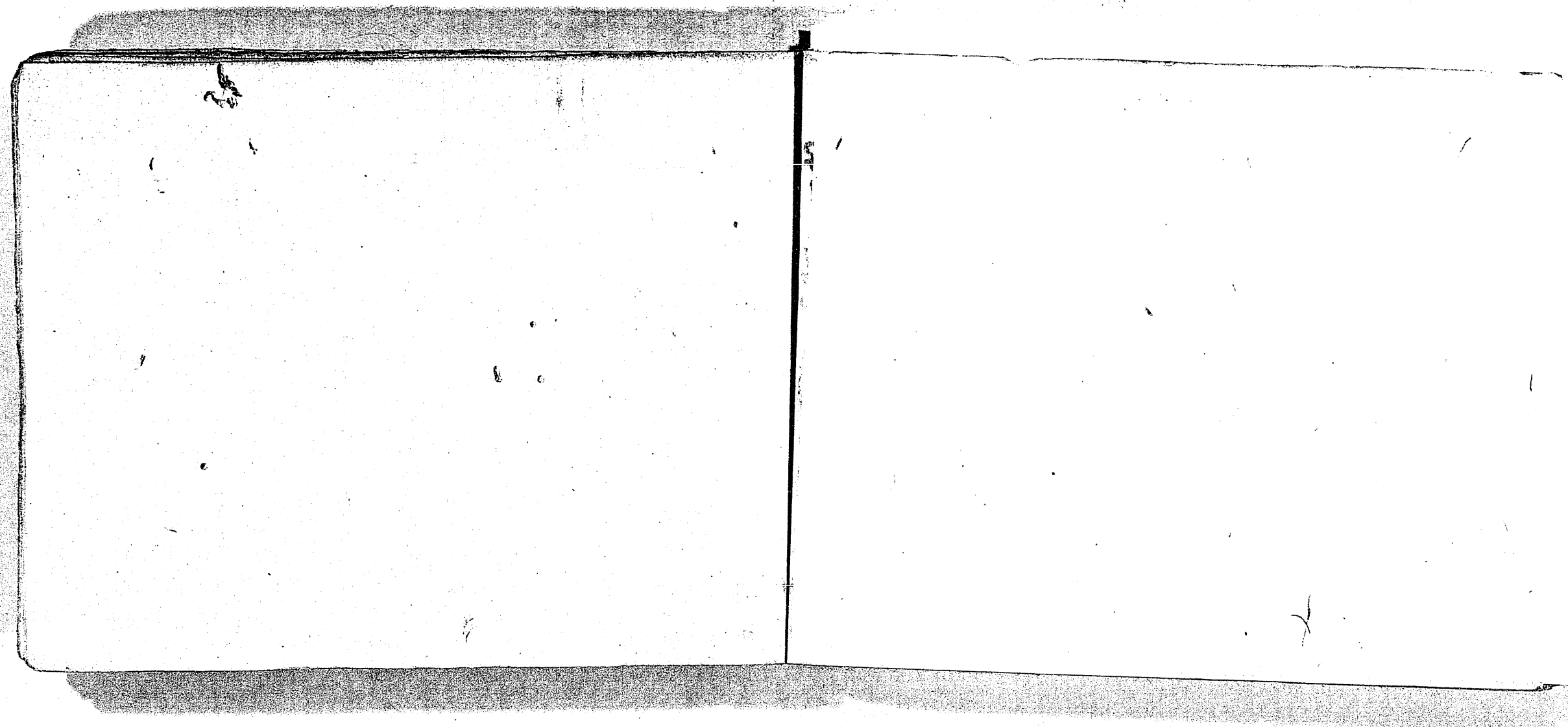
—

下りてきし

休下、支役り、早き者、相い

恒而無心
破而無心
伏而無心

子西子西子西



以下 6 葉余白

